

古本屋雑記

善光洞 山崎書店 山崎晴樹

「町の古書店」から連想されるのは、黴臭い、暗い、重苦しい、年老いた店主がメガネ越しに店番といったところだろう。良くも悪くも、どこか特別な世界めいたイメージがあるように思われる。昔から洋の東西を問わず、古書とそれに関わる人々の、常軌を逸したエピソードに事欠かないのをみても、それは当然かもしれない。

こんな話がある。19世紀のスペインのコレクターが、世界にただ一つしかない本を手に入れるため、放火殺人まで犯した。弁護士が彼の罪を軽くするため、同じ本をもう1冊探し出して、証拠として提出したところ、男は泣き伏し、「世界に1冊ではなかった。」と言いつつ、死刑台の露と消えたと言う。この話は、庄司浅水先生の著作集にあるものだ。他にも、梶山季之著「せどり男爵数奇譚」、M・ペイジ著「古書殺人事件」などなど……古書の世界は普通とはちょっと違う世界であると思われる。

東京の大学を卒業後、古書店での修行を終え、初代の父から「善光洞 山崎書店」を支店というかたちで引き継いだ。十八坪ほどの店を、長野市役所通り(昭和通り)に構えたのは昭和63年のことであった。それより40年ほど前、父は若松町(信州大学教育学部と中央通りを東西に走る通り)に、本店を開店している。父は松本市にあった「ヤマトヤ本店」で修行をし、当時旧長野市役所、消防署等公共機関があり、人通りの多いこの地に店を構えた。「ヤマトヤ本店」は、現在「細田書店」と名を変え、店主の細田盛弘氏は、長野県古書籍商組合の理事長として、大活躍中である。

三百メートル程の長さの若松町には、新刊書店、古書店合わせて五軒の店が営業をし、ちょっとしたミニ神田通りとなっており、学生、勤め人などなど多くの本を求める人々に連日にぎわっていた。長野県古書籍商組合には、三十一店が加盟しており、長野市内ではそのうちの六店が加盟。父が営む本店は、信州大学教育学部が近くにあるため、教育書関係、文学書、国語国文書等の品揃えをし、学生が利用しやすい価格になっていたように記憶している。学生の活字離れと、市役所の移転などで若松町の通りがさびしくなり、また長野オリンピック開催に伴い、道路拡張となり、五店舗あった書店も今では、新刊書店、古書店一店舗ずつとなってしまった。当店も、本店・支店と違った本の品揃えで競合しあってきたが、道路拡張とともに「本店」を閉めた。

本店と支店が合体した店内には、郷土史、歴史、宗教、哲学、近・現代文学、美術、音楽等をはじめ、初版本、夏目漱石、泉鏡花、川端康成、三島由紀夫……珍しい本、限定本などの類が並んでいる。仕入れた本は、必ず一度は棚に並べ、古書店めぐりを楽しむお客様の目にとまるように心がけてきた。また、店のイメージも、明るく、きれいに、BGMを流し、時を楽しめる場所にと変身させた。

「いいものをそろえてあれば古書好きのお客様は必ず来てくれる。」東京池袋の修行時代、旦那高野之夫に事あるごとに言われ続けてきたように、本が動き、どの棚も常に新鮮さを失わないようにしてきた。

その高野書店での修行が、とりあえず五年という期限付きで始まったのが昭和49年。当時の世相ということもあってか、「解放」「前進」などの政治的な機関誌をはじめ黒田寛一、羽仁五郎、吉本隆明、埴谷雄高、などの著作が天上高く積み上がり、店内には連日それらを求める二十代、三十代の若いお客様の熱気でむせかえていた。当時の私は、店先にしつらえた「均一本」の棚を担当しながら店番をしていたものの、全集にはさみこまれる「月報」すら知らず、直接お客様から教わったほどの古書音痴であった。今でもそのことを思い出すと冷や汗が出る。

昭和52年、池袋西口駅前にある大型新刊書店の「芳林堂」の七階に高野書店をオープンさせた。当初、新刊大型書店の七階に文科系専門の古書店を開くのは無謀だと言う声が大半を占めていたが、古書好きのお客様が集まれる店にしたいということもあって、澁澤龍彦の「かも猟」「妖人奇人館」「犬狼都市」や、ネルヴァル、クロソフスキー、ブランショなど、当時でも限られた読者しかいなかった本をはじめ、初版本、限定本、などもケースがいっぱいになるまで揃えた。毎日品揃えに気を配り、お客様から「本が動いて棚が変わっているな」と思われるように心がけた。

まだ今ほど古書情報が普及していなかった時代である。それでも、口コミで少しずつ古書店めぐりを楽しむお客様も増えてきた。ときには目の肥えたお客様も訪れるようになった。生来、人好き、話好きの私は、恥ずかしげもなく、来店されるお客様をつかまえてはいろいろなことをお聞きした。そういったお客様一人一人から多くのことを学ばせていただいた時代でもあった。

中でも貴重な体験となったのは、昭和55年、すでに恒例となっていた東京組合北部支部主催「西武古書まつり」のときのことである。

開催にあたり、どこにでもあるような目録では芸がないということで、これまでとは違

ったものを考えようということになった。そこで私が一計を案じたのが『文学賞』その過去と現在く文学賞蒐集のおもしろさ」というものであった。巻末には写真入り二十頁を掲載することにした。

その企画の基となったのは、埼玉にお住まいで仕事柄全国の古書店をめぐり、古書蒐集を楽しんでおられた三浦氏の蔵書の一部を以前より氏と共同で、写真を撮りながら資料をまとめていたことからであった。三浦氏は私の古書の先生の一人でもある。

件の古書展には、参考資料として芥川賞、直木賞の受賞作品を並べることにした。第一回芥川賞の石川達三『蒼氓』、直木賞の川口松太郎『鶴八鶴次郎』から八十一回分の受賞作を揃えることになったのだが、第十九回の小尾十三『雑巾先生』だけを揃えることができなかったことに、今でも悔いが残る。

修行を始めて三年目くらいから、明治古典会など神田の交換会(市場)に一人で行くことが許されるようになった。全国各地から集まる多数の本の山、この本の山の中から自分の店に合った本を見つけ、入札する。多数の本をこの交換会で見たことが後々大変生きてきた。他の古書店主たちにまじって、一番頭の自分が入札をし、落札した。

そこでは毎回、優品珍品等の書籍に触れることができた。その貴重な体験と諸先輩からのアドバイスが現在の私の源にもなっている。

ふるさと信州に帰郷して十年、古書好きのお客様がわが店にも徐々に集うようになってきた。新しい本が入荷したとき、「この本はあのお客様が欲しがっていたはず」と、自然とお客様の顔が浮かぶようにもなってきた。一人ひとりのお客様との出会いがあったからこそやってこれたことでもある。

しかしここ数年古書店のあり方が少しずつ変わってきた。古書目録の作成、通信販売、そしてインターネットの導入である。今、全古書連(全国古書籍商組合連合会)が「日本の古本屋」というホームページを開いている。インターネットと古本。この新旧二つのメディアが意外と愛称がいいことにいち早く気づき、全国の古書店に参加を促してきた。現在登録されている各店が五十音別、地域別に検索できるようにしてある。もちろん各店が登録している目録から書名・著者名・キーワードなどで自分が捜している古書を一斉に検索することもできる。古臭い個人企業と思われがちだが、実は早くからパソコンによる商品のデータベース化に取り組んできた。それは古書店の仕事が古書という商品一冊ずつに付加価値をつけて売るデータベースだからである。もちろん古書全部が高付加価値の商品ではない。もっとも高価なものは江戸時代以前に出版された古典籍、稀覯本(珍本・稀書)、肉筆もの(手

書きの書や絵画、有名作家の生原稿)など骨董的価値を持つ本。次に専門書・学術書。そして最も単価の低い商品が一般書。文庫・新書、コミック等の雑本及び雑誌である。

古書店によって、これら三種類の商品を扱う比重が違う。売り上げの大きい店ほど古典籍、専門書の比重が高く、小規模な店ほど雑本・雑誌類が中心となる。その違いは店構えからは大変わかりにくい。なぜならば高価な本が店頭に並ぶことは少ないからだ。古書店は、古典籍、稀覯本、専門書などに絶妙の値付をして、それを目録として印刷し、固定客に送付して注文を受ける販売方法を主体にしている。いわゆる通信販売だ。そしてその目録作りにパソコンのデータベースが有効だったわけである。各店のデータベースを結んで検索できるようになり、インターネットを活用して、もうひとつの通信販売ができるようになってきたのである。またその一方で、古典籍、専門書、学術書などの品薄感が強まり、古書店がほしい本が不足気味になってき始めているのである。全国にある組合加盟の古書店が一層の努力を積み、お客様の大切な蔵書の整理のお手伝いをし、良質な本の仕入れを活発に行いつつ、販売につないでいくときが来つつあるように思う。

お客様が集まる店、お客様の顔が見える本の売り方、仕入れ方、これからもっと通信販売が増える一方でも、私はお客様との会話を楽しみ、本についての知識を吸収しつつ、「古書好きのお客様が必ず来てくれる」自慢の本棚づくりに努力していきたいと思う。

(やまざきはるき)

○引用文献

「インターネットで変わる日本の古書店」 吉村克巳著

「定本庄司浅水著作集」 出版ニュース社

○参考資料

「山崎書店主人」 小野三郎著

※「日本古書通信」 1998年11月号に発表した原稿に加筆したものです。